### 【開催概要】

テーマ	第1回FD研究会
	遠隔授業の授業設計~4 つの事例から今学期の遠隔授業を考える~
開催日時	同時双方向 2021年4月28日(水)16:10~18:00
	オンデマンド 2021年5月13日(木)~6月11日(金)
開催方法	Zoom (同時双方向) /オンデマンド
講師	発表者
	メドロック 皆尾 麻弥 (文学部英米学科 准教授)
	市川 定敬(仏教学部仏教学科 准教授)
	小池 桂(社会福祉学部社会福祉学科 教授)
	相馬 伸一 (教育学部教育学科 教授)
	司会
	岡﨑 祐司(教育推進機構長)

### 【報告】

2020 年度より始まった Google Classroom を使用した遠隔授業について、情報共有することで授業改善に役立ててもらうことを目的に、受講者数や授業方法の異なるタイプの遠隔授業について、4人の教員に事例発表をしてもらった。

## ①音声付きパワーポイント教材による遠隔授業

「言葉と文学」メドロック 皆尾 麻弥 (文学部英米学科 准教授)

受講者数は44名の全学共通科目で、Edgar Allan Poe の英詩を読み込んでいく授業である。詩の特徴に加え、韻律や音にも注目してもらう内容となっているため、詩を朗読した音声ファイルを埋め込んだ PowerPoint を視聴するオンデマンド形式の授業とした。動画教材にしなかった理由は、授業内容の性質上動画にする必要がなかったことと、文字と音声に注目してもらいたかったからだ。PowerPoint の所々に課題を設定することで、学生自身に考えてもらうように構成し、視覚的にも楽しめるようスライドのデザインも工夫した。遠隔授業ではあったが、学生に毎回感想を提出してもらい、一人一人に必ずフィードバックをすることで学生の理解度も把握し、取りこぼさず指導ができたと報告された。

### ②大人数講義での遠隔授業

「ブッダと法然」・「宗教学概論」市川 定敬(仏教学部仏教学科 准教授)

「ブッダと法然」は1年生の必修授業でこのクラスの登録者数は153名。PowerPoint は

使用せず毎回テキストの当該授業日の学習範囲を提示し、それに対する課題を課した。学生はテキストの指定された部分を読み、印象に残った点、理解できなかった点を提出する。授業は、前週に学生から提出された課題の中で、目に付いたところに対して、コメントするという流れで開始。遠隔授業であっても双方向型にするために、学生から寄せられた全ての質問に回答した。

「宗教学概論」は254名の大人数授業で、「ブッダと法然」と同様にテキストの範囲を指示し、課題を提出してもらう形で進めた。対面授業を行っていた時より学生が確実に教科書を読んでいることは分かったが、受講生に上級生が含まれるためか、1年生を対象とした授業ほどは学生から質問が寄せられず、コミュニケーションの難しさを感じた。

全員へのフィードバックは受講生の声を拾い上げるには良いが、登録者数が多いと膨大な時間がかかることが課題であると述べた。

## ③講義資料と授業動画を使った授業

「社会福祉史」小池 桂(社会福祉学部社会福祉学科 教授)

登録者数は130~140名程。テキストは使わず、レジュメと動画をアップする形式で行った。予習をしてもらうためレジュメは実際の授業の1週間前にGoogle Classroom アップした。レジュメは要点を絞り、動画との連動性を重視した構成とし、学生の理解が深まるよう工夫を凝らした。動画ではラジオ講座のように学生が聴講していることをイメージし、大切なことは繰り返し説明する、聞きやすいようはっきりを話をする、学生に考える時間を与えるといったことを心がけた。学生の評価は様々で、基本的知識がない状態で授業に臨むため、理解が難しいという学生もいれば、対面と変わらないくらいの授業を受けたられたと感じたという意見もあった。ただ、学生の反応が分からず、講義が一本調子になりがちになってしまうことが欠点であったと述べた。

### ④授業目標達成に向けた、工夫されたオンデマンド授業

「教育原論」相馬 伸一 教授(教育学部教育学科 教授)

「教育原論」は教育学部生の必修クラス(登録者数 200 名前後)と、教職課程を履修する教育学部生以外の学生が対象のクラス(登録者数 30~70 名)の 2 種類がある。教職課程コアカリキュラムで求められているトピックを教育者が直面する課題場面と関連づけるように内容を構成した。単位の実質化のため、教科書を作成し、それに対応した PDF 資料、講義動画、参考動画、予習・復習の課題を Google Classroom にアップした。学生からの質問には可能な限り早く対応し、教員への限定公開の質問であっても、回答をなるべく受講生全員に共有するように努めた。遠隔授業では孤立した環境での学びになるが、そのことが却って学習の促進につながる可能性を感じるとも語った。

上記発表の終了後は、質疑応答や意見交換を行った。

#### 【開催概要】

テーマ	第3回FD研究会
	学生アンケートから見る Google Classroom の使い方【前編】
開催日	2022年3月29日(火)~5月31日(火)
開催方法	オンデマンド
講師	岡﨑 祐司 (教育推進機構長)
	斉藤 利彦(学生支援機構長)

#### 【報告】

学生を対象に実施した各種アンケートの報告、およびアンケート結果をふまえてのディスカッションを行った。

まずは岡﨑教育推進機構長より、「2021(令和 3)年度コロナ禍における学習実態調査」の結果報告を行った。これは学部 1.2 年生を対象に、どのようなデバイスで遠隔授業を受講していたのか、受講していた時間帯や遠隔授業に対しての評価を知るために学生支援部と教育推進部の共同で実施した調査である。調査の結果から受講しているデバイスはパソコンが多いこと、オンデマンド授業の場合には、実際の授業の時間割とは異なる時間帯に授業を受講している学生が多いこと、約70%の学生がオンデマンド授業でシラバスにある到達目標を達成できていると感じている(「達成している」「やや達成している」の回答者の合計)こと等が分かった。また、「コロナ感染症が終息、落ち着いた場合、引き続き遠隔授業を受講したいか」との問いには、約80%の学生が受講したい(「多くの授業で受講したい」「一部の授業で受講したい」の回答者の合計)と考えおり、遠隔授業が肯定的に受け入れられていることも分かった。

続いて学部生・大学院生を対象に 2021 年 10 月に実施した「学生生活実態調査 2021」について、斉藤利彦学生支援機構長より報告された。遠隔授業が新しい授業スタイルとして定着し始めているが、調査の自由記述への回答では大学に対して、授業に対して、多くの意見が寄せられている。この結果から今の学生はオンデマンド授業の質の良し悪しが分かるようになってきていると思われる。これは全国的な傾向であり、各大学の実態調査等でもそのようにあげられている。そのほか今回の結果の特徴として、遠隔授業に対する自由記述の内容が「学費」とリンクするものが多くなっている。大学に関する期待や要望についても「授業料を安くしてほしい」が 60.5%と前回より 8.2 ポイント上昇しており、コロナ禍の影響が顕著に表れている。

また、「今、不安や悩みがあるとすれば、それは何ですか?」との問いには、「進路(就職・ 進学)」が57.5%と第1位、第2位は「学業」で48.9%であった。学生の「充実度」につい て、本学は全国と比較すると毎回 10P ほど低いが、今回さらに低い結果となった。 授業への満足度が学生の「充実度」に与える影響は大きく、様々な検討課題はあるが、特に 遠隔授業においては、質をあげる方法を検討し、学内で共有していくことが大切であると述 べた。

これらの報告の後、岡﨑教育推進機構長、斉藤学生支援機構長の二人で、「2021 年度コロナ禍における学習実態調査」の自由記述回答をもとにディスカッションを行った。

### 【開催概要】

テーマ	第 3 回 FD 研究会
	学生アンケートから見る Google Classroom の使い方【後編】
開催日	2022年3月29日(火)~5月31日(火)
開催方法	オンデマンド
講師	発表者
	稲永 知世(文学部英米学科 准教授)
	長光 太志(社会学部現代社会学科 講師)
	上田 道明(社会学部公共政策学科 教授)
	橋本 憲尚 (教育学部教育学科 准教授)
	司会
	岡﨑 祐司(教育推進機構長)
	斉藤 利彦(学生支援機構長)
	新井 康友(学生支援推進室長)

## 【報告】

1.2 年生を対象に実施した「2021 (令和 3) 年度コロナ禍における学習実態調査」の中で、 学生から「教育効果が高かった授業」との意見が多く寄せられた遠隔授業の 4 人の担当教 員に、Google Classroom を使った授業デザインや授業運営の工夫についてインタビュー形 式で話を伺った。

## ①「英語と英米文化」 稲永 知世(文学部英米学科 准教授)

この科目は、中国学科の学生は必修、日本文学科は希望者が履修する科目である。授業では英語圏の文化を学ぶが題材として「サッチャー」や「イギリスの EU 離脱」「ジェンダー」等を取り上げている。毎回の授業は、動画、資料、授業内課題、確認テストの4つで構成し、動画の視聴後に学生自身が調べ自主的に学ぶ形式とした。動画は PowerPoint に音声をつけたもので、1 本あたり 40 分ほど。スライドは重要な箇所は赤文字で表示しているが、黄・緑も使用する等、色によってのルールよりも配色のバランスを重視し作成した。また、確認テストは Google フォームで作成し、これとは別にミニレポートを5回課し、ミニレポートには限定コメントの機能を使って全員にフィードバックを行った。この科目は英語に興味のない学生も履修しているため、英語圏の文化を知るだけでなく、自ら調べ、自分で勉強する姿勢をつけて欲しいという思いから、授業内課題を課すことにした。全体としてはきちんと考えて提出された課題が多かったと感じた。

今回の反省点として情報量が多かったこと。また、学生がよく知っているアニメなどのポップカルチャーもテーマとして取り入れていけばよかったと感じていると述べられた。

### ②「現代社会論」 長光 太志(社会学部現代社会学科 講師)

遠隔授業を実施する中で、学生の学習を促すサイクルについて特に工夫した。例えば、学生が授業を聞くだけにならないように課題等を重視し、学生へのリフレクションを大切にすることを心掛けた。また、課題はあくまで授業の理解を深めるために出しているという前提に立って、レポート課題ではなく、授業への理解を深めるために授業の「ノート」を作成し提出してもらうこととした。授業動画は、学生にノートを作成してもらうことを前提に45分~1時間にし、学生が見直す時間も含めて90分になるように設定した。授業動画は、「ラジオっぽさを意識すること」「リフレクションを行うこと」「冒頭に問いかけを入れて、授業全体を通じて答えていく」「ノート課題にまとめる内容を明示する」の4点をポイントにおいた。課題のノートについて、良かったものを動画内で紹介したが、良いノートに学生は触発され、さらに良いノートが提出されるなど、教育効果も高まった。

遠隔授業のデメリットについて、導入のハードルの高さを挙げられたが、メリットとして 動画を作成してしまえば、教員が授業時間に縛られない、自分の授業を客観視できることを 挙げられた。合わせて、動画作成については、大学としてのフォロー体制も必要であると述 べられた。

## ③「現代市民論」 上田 道明(社会学部公共政策学科 教授)

この科目は社会学部の学部基幹科目であり、1年生から受講が可能な基本的な知識を修得するための科目である。2021年度秋学期は約250名ほどの学生が受講しており、高い割合で1年生が受講していた。授業はレジュメと音声ファイルで構成しており、学生にはなるべくプリントアウトしたレジュメを手元に用意し、メモを取りながら受講するように指導した。Google Classroom はトピックをまとめるなど学生が見やすいように工夫し、掲示板機能を活用して学生とコミュニケーションをとるようにした。毎回任意のレポート(字数200~400字)を課し、評価の高いレポートにはボーナス点を与えるようにしたこと。毎回レポートを通じてライティングの指導ができ、学期末には意欲の高い層は、対面授業の時よりも文章の質が向上していた。学生の学びの深まりが、対面とは違う形で出てきていると感じた。しかし、任意のレポートは提出せず、明らかに講義を聞いていないと思われる定期試験の答案も見受けられ、意欲の高い層と低い層の二極化が進んだようにも感じた。

Google Classroom を活用することで、対面授業でも書く力を伸ばすこともできるとわかり、遠隔授業のよい点を対面授業にも活かしていきたいと述べられた。

### ④「教育心理学」 橋本 憲尚(教育学部教育学科 准教授)

「教育心理学」は教職科目であり、学習目的の第一は基礎知識の定着である。この目的に

そった授業資料の作成がオンデマンド遠隔授業の肝と考えた。PowerPoint スライド1枚 (授業1回当たり3~4枚)にある程度まとまった知識構造をわかりやすく示し、ポイント ごとに音声ファイル(スライド1枚当たり5~6つ)を付ける工夫を行った。また、毎回の 授業タイトルを記したスライドには、イントロダクションとして授業の趣旨・概略を伝え る音声ファイルも付した。さらに、最終的にどのような課題を作成し提出するのか、学生 が見通しをもって学習できるように予め説明も行った。最後のスライドでは課題を2つ、 1つ目は「概念整理」(基本的な用語説明や用語を使った要約文作成)、2つ目は「概念検 討・吟味」(学習内容を踏まえた教育実践場面に関する論述)の異なる2タイプの課題(い ずれも回答文字数範囲を指定)を毎回提示した。字体・文字の大きさを指定したテンプレー トを用意し、課題提示から2週間以内に記入・提出を求めた。これは、多数の受講生から の回答の文字数を一目で確認し、記述内容チェック時間の短縮を図るための処置である。 要するに、細かな知識の定着の目的を達成すべく、ポイント事項を効率良く何度も復習で きる教材提供を目指したわけである。どのスライドに何が(場合によっては全スライド)説 明されているか確認をスムーズに進行させるために、詰め込みの印象はあってもスライド の枚数は限定しておく。分かりにくい箇所に焦点を当てて繰り返し学習できるよう、細か な事項ごとに短い音声ファイルを挿入する。課題は毎回の授業の学習目標であって、この 課題達成のために学生が自分のペースで学習できるよう教材設計を心がけた。

#### 【開催概要】

テーマ	2022 年度に向けたシラバス作成研修会
開催日時	2021年12月20日(月)~2022年3月24日(木)
開催方法	オンデマンド
講師	岡﨑 祐司 (教育推進機構長)

### 【報告】

まず「シラバスの役割」について、学生にとっては授業を選択する際に、情報を得るためのものとなり、教員にとっては授業の設計図となると述べられた。学生はシラバスを見てどのような授業かを想像し、選択することになる。また、教員は学生にどのように授業に取り組んでほしいか、学生に求めたいことを提示できる、学習成果を高めるための情報提供でもある。次に本学のシラバスからいくつかの項目を取り上げ、解説された。

「授業のテーマ」は、それを見て概ね授業の内容がイメージでき利用なトピックスやキーワード、先生方がここは面白い、興味深いと感じていることが伝わるように書いていただき、「授業の目的・ねらい」は先生方の独自性を出していただく部分で、科目担当者としてこの授業で受講生に何を理解してほしいと思っているのか、どんなことを伝えたいのかを書いて欲しいと説明された。

「毎回の授業のテーマの注意点」について、これは授業の目的・ねらい、到達目標を考えたときに、先生方の専門性に基づいて 15 回どのように進めていくかという設計図となる。ただ、実際授業を行ってみて、学生の理解が追い付いてないことがわかれば、順番を変えるなど柔軟に対応すべきで、必ずしも当初のシラバス通りに 15 回進めなければならないわけでない。その他、授業時間外の学修や参考文献の書き方などの注意点が続いた。

最後に、現行のシラバスは講義概要の延長線上にあり、学生が授業のたびに毎回確認するようなところまではできていないと思うが、この授業で学生に何を学んでほしいのかを伝えることができる、学生と教員をつなぐツールであると述べられた。この授業を受けて、学生がどのように変化するかイメージしながら書いて欲しい。また、高校までの学び方から脱却できない学生も多いので、大学での学びの方法やあり方を知ってもらう役割もある。履修登録の時だけでなく、授業期間中にも活用して欲しい。シラバスをしっかり読みこみ、学生の豊かな学びにつなげてほしいと締めくくった。